

2024 年 9 月

食料安全保障月報

(第 39 号)



令和 6 年 9 月 30 日

農林水産省

食料安全保障月報について

1 意義

我が国は食料の大半を海外に依存していることから、主食や飼料原料となる主要穀物(コメ、小麦、とうもろこし)及び大豆を中心に、その安定供給に向けて、世界の需給や価格動向を把握し、情報提供する目的で作成しています。

2 対象者

本月報は、2021年6月まで発行していた海外食料需給レポートに食料安全保障の観点から注目している事項を適宜追加する形で、国民のみなさま、特に、原料の大半を海外に依存する食品加工業者及び飼料製造業者等の方々に対し、安定的に原料調達を行う上での判断材料を提供する観点で作成しています。

3 重点記載事項

我が国が主に輸入している国や代替供給が可能な国、それに加えて我が国と輸入が競合する国に関し、国際相場や需給に影響を与える情報（生育状況や国内需要、貿易動向、価格、関連政策等）について重点的に記載しています。

4 公表頻度

月1回、月末を目処に公表します。

2024 年 9 月食料安全保障月報（第 39 号）

目 次

概要編

I	2024 年 9 月の主な動き	1
II	2024 年 9 月の穀物等の国際価格の動向	5
III	2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント	5
IV	2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント	5
V	今月の注目情報「豪州及びカナダの穀物等の生産・輸出動向」	6

（資料）

1	穀物等の国際価格の動向	1 0
2	穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移	1 1
3	穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、品目別）	1 2
4	加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の状況	1 4
5	食品小売価格の動向	1 8
6	海外の畜産物の需給動向（ALIC 提供）	1 9
7	FAO 食料価格指数	2 1

今月のコラム

	「アルゼンチンのローカルフード事情について」	2 2
--	------------------------	-----

品目別需給編

I	穀物	
1	小麦	1
	＜米国＞	2024/25 年度の輸出量は 22.5 百万トンに回復の見込み
	＜カナダ＞	2024/25 年度の生産量は前月から下方修正され 34.3 百万トンの見込み（AAFC）
	＜豪州＞	2024/25 年度の生産量は上方修正され 31.8 百万トンの見込み（ABARES）
	＜EU27＞	2024/25 年度の生産量は前年度比 7.2%減、輸出量は同 26.1%減（欧州委員会）
	＜ロシア＞	2024/25 年度の輸出量は 48.0 百万トンの見込み
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は上方修正され 22.3 百万トンの見込み
	＜中国＞	2024 年 1 月～7 月の輸入量は前年同期比 15.6%増
2	とうもろこし	9
	＜米国＞	単収の引上げにより、生産量は 1.0 百万トン上方修正
	＜ブラジル＞	2024/25 年度の生産量は 4.1%増加の見込み
	＜アルゼンチン＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から 2.0%増加する見込み
	＜ウクライナ＞	2024/25 年度の生産量は、前年度より 16.3%減の見込み
	＜中国＞	2024/25 年度の生産量は、前年度から 1.1%増加する見込み

3 コメ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	15
＜タイ＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.5%増加する見込み	
＜米国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ0.7%増加する見込み	
＜中国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.0%増加する見込み	
＜インド＞ 2024/25年度の生産量は、前年度に比べ1.5%増加する見込み	
＜ベトナム＞ 2023/24年度の生産量は、前年度に比べ0.5%減少する見込み	
II 油糧種子	
大豆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
＜米国＞ 2024/25年度の生産量は前年度より10.1%増加する見込み	
＜ブラジル＞ 2024/25年度の生産量は前年度より10.5%増加する見込み	
＜カナダ＞ 2024/25年度の生産量は前年度より3.1%増加する見込み (AAFC)	
＜中国＞ 2024/25年度の生産量は、前年度より0.7%減少する見込み	
＜アルゼンチン＞ 2024/25年度の生産量は、前年度より6.0%増加する見込み	
（参考1）本レポートに使用されている各国の穀物年度について（2024/25年度）・・・	27
（参考2）単位換算表・・・・・・・・・・・・・・・・	27
（参考3）各国のクロップカレンダー一覧（主要品目毎）・・・・・・・・	28

特別分析トピック

「我が国の種畜をめぐる動向」

【利用上の注意】

表紙写真：ウクライナのポルタヴァ州の圃場。次の作物の栽培に取り掛かるため、大豆の収穫作業を急ピッチで進めている。（ポルタヴァ州 2024 年 9 月 2 日）

(概要編)

I 2024 年 9 月の主な動き

主要穀物等の需給・相場等について

主要穀物等の 2024/25 年度の作況について、北半球では小麦等が収穫期を迎えており、とうもろこしや大豆等の作物が成熟期から収穫期を迎えている。なお、南半球では 2023/24 年度の作物の収穫がほぼ終了している。

2024/25 年度の状況について、品目別にみると、9 月の米国農務省（USDA）の需給報告によれば、小麦については、EU、ロシアで単収・収穫面積ともに前年度より減少するものの、豪州、米国、中国で単収・収穫面積ともに増加、カザフスタン、インド、カナダで単収が増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。ロシアのウクライナ侵攻に関連し、2022 年 3 月に過去最高を更新した小麦の国際相場は侵攻時の水準を下回ったものの、ウクライナ産穀物の輸出再開に関する 4 者合意（黒海穀物イニシアティブ）については 2023 年 7 月にロシアが離脱し停止。現在、黒海の臨時回廊からの輸出が順調に機能しているものの、EU の東欧経由での輸出の進捗も含め注視が必要。

とうもろこしについては、ブラジル、南アフリカ、メキシコで単収・収穫面積ともに前年度より増加、中国で収穫面積が増加するものの、ウクライナで単収・収穫面積ともに減少、米国で収穫面積が減少すること等から、世界全体の生産量は前年度を下回る見通し。

大豆については、ブラジル、米国、アルゼンチンで単収・収穫面積ともに増加すること等から、世界全体の生産量は史上最高となる見通し。

いずれの品目も、旺盛な消費需要により期末在庫は依然としてタイトな状況であり、引き続き注視が必要。

FAO（国連食糧農業機関）が公表している食料価格指数については、主に砂糖、肉、穀物の価格の低下等により、7 月の 121.0 から、8 月（最新値）は 120.7 に下落（参考：2023 年 8 月 122.0、2022 年 8 月 137.6、2021 年 8 月 128.0、2020 年 8 月 95.9）。海上運賃については、バルチック海運指数（穀物輸送等に使用される外航ばら積み船の運賃指数）が、直近 5 カ年の平均値より約 1 割高い水準で推移。

早期注意段階の継続について

緊急事態食料安全保障指針に基づく「早期注意段階」については、2021 年 7 月に、主要輸入農産物の国際価格や海上運賃の上昇、国際的な物流の遅れ等の当時の状況を踏まえて適用。2024 年 9 月も引き続き適用した一方で、主要穀物等の国際相場や海上運賃についてはここ最近下落傾向で推移しており、引き続きその動向に留意。

【参考】早期注意段階について（農林水産省 HP）

<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/anpo/soukichuui.html>



ウクライナの生産・輸出動向

USDA の 9 月需給報告によれば、2024/25 年度の小麦の生産量は、収穫面積は増加するものの単収が減少することから、前年度より 3 % 減少し 2,230 万トンとなる見込み。また、とうもろこしの生産量は、収穫面積・単収ともに減少することから、前年度より 16% 減少し 2,720 万トンとなる見込み。2024/25 年度の小麦の輸出量は、生産量及び期首在庫の減少を受け、前年度より 19% 減少し 1,500 万トンとなる見込み。とうもろこしの輸出量も前年度より 19% 減少し 2,400 万トンとなる見込み。

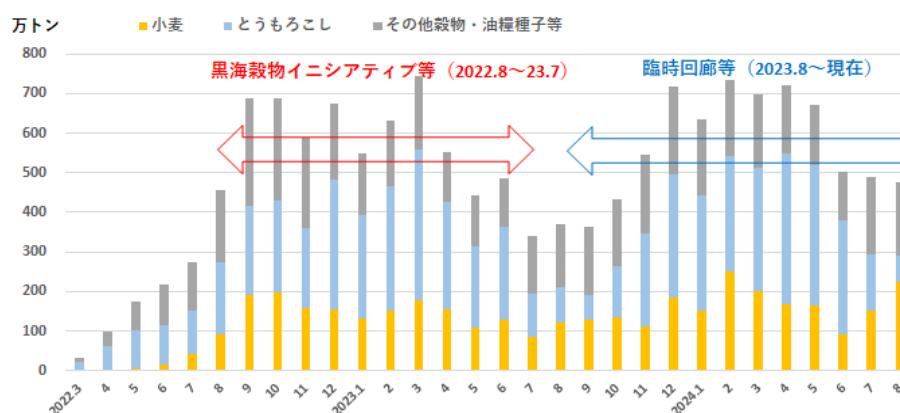
ウクライナ農業政策食料省によれば、9 月 5 日現在、2024/25 年度の小麦の収穫作業は終了し、とうもろこしの収穫作業は始まったばかりである。ウクライナ気象センターによれば、8 月末現在、とうもろこしは概ね黄熟期から完熟期にある。

臨時回廊からの輸出状況

2022 年 7 月 22 日の国連、ウクライナ、ロシア及びトルコの 4 者によるウクライナ産穀物の黒海経由での輸出再開に関する合意（黒海穀物イニシアティブ）により、同年 8 月以降、オデーサ港等 3 港（オデーサ港、チョルノモルシク港、ビブジェヌイ港）からの輸出が再開したが、2023 年 7 月 17 日にロシアが同イニシアティブからの離脱を表明し、輸出が停止した。ウクライナ農業政策食料省によれば、同イニシアティブ履行期間中の輸出実績（2022 年 8 月～23 年 7 月）は、穀物・油糧種子等 6,846 万トン（うち、小麦 1,728 万トン、とうもろこし 2,949 万トン）。

ウクライナは、ルーマニア・ブルガリアの黒海沿岸を通過する新ルート「臨時回廊」を国際海事機関（IMO）に通報し、2023 年 8 月以降、運用が開始された。現在、臨時回廊や、運河等を利用し、ルーマニアのコンスタンツァ港などを経由した輸出が行われている。輸出ルートのうち、EU 域内を経由した輸出（鉄道又はトラック）は減少傾向にある一方、臨時回廊からの輸出量が大半を占めている。ウクライナ農業政策食料省によれば、2023 年 8 月～24 年 8 月までの穀物・油糧種子等の輸出量は 7,364 万トン（うち小麦 2,083 万トン、とうもろこし 2,953 万トン）と、黒海穀物イニシアティブ履行期間中の月平均輸出量（570 万トン）と同水準（566 万トン）となっている（参考）。

（参考）ウクライナの輸出量の推移（月毎）（2022 年 3 月～2024 年 8 月）



出典：農業政策食料省のデータをもとに農林水産省で作成

注：データは港湾、鉄道、陸路などすべての輸出の計。

1 EU：欧州南東部の高温乾燥によりとうもろこしの単収が悪化

USDA によれば、2024/25 年度の EU のとうもろこしの生産量は 5,900 万トンと、前月予測から 2% 下方修正され、前年度から 4% 減少し、過去 5 年平均を 8% 下回る見込み。収穫面積は 860 万ヘクタールと、前月予測から変更ないものの、前年度より 5% 増加し、過去 5 年平均を 3% 下回っている。単収は 6.86 トン/ヘクタールと、前月予測から 2% 下方修正され、前年度より 8% 減少し、過去 5 年平均を 5% 下回っている。

とうもろこしは、バルカン半島の主要な夏作物であるが、高温乾燥型の天候により単収の悪化が顕著になっている（図 1、2）。加えて、当該地域では灌漑設備が限られており、作柄の悪化に拍車がかかることが懸念されている。なお、高温乾燥に耐性があるひまわりがとうもろこしの代替作物として好ましいが、ひまわりは頻繁な輪作が必要となる。

ルーマニアのとうもろこしの生産量は 780 万トンと、前月予測から 90 万トン下方修正、ハンガリーは 520 万トンと前月予測から 70 万トン下方修正された。一方、EU 最大のとうもろこし生産国であるフランスは、前月予測から 40 万トン上方修正され 1,400 万トンとなる見込み。同国の冬小麦は降雨過多により大幅な減産となったが、とうもろこしの生長には多くの水分を必要とするため、逆に生産量が増加する見込み。

2 インド：コメの収穫面積が過去最高を記録

USDA によれば、2024/25 年度のインドのコメの生産量は 1 億 3,900 万トン（精米ベース）と、作付面積の増加により、前月予測からわずかに上方修正され、前年度から 1% 増加する見込み。収穫面積は 4,850 万ヘクタールと、前月予測から 1% 上方修正され、前年度から 2% 増加。また、インド農業・農民福祉省「作物状況報告書」（2024.8.30）によれば、綿花に比べて単収が高く、投入コストが低いコメに作付けがシフトしており、作付面積は前年度から 4% 増加する見込みとされている。一方、単収は 4.3 トン/ヘクタールと、前月から前年度からもわずかに減少する見込み。なお、コメの主産地では降雨に恵まれ、作付ペースは平年を上回っているという。

図 1：EU の植生指数（平年対差）（2024. 8）

欧州南東部で作物の作柄が悪化



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

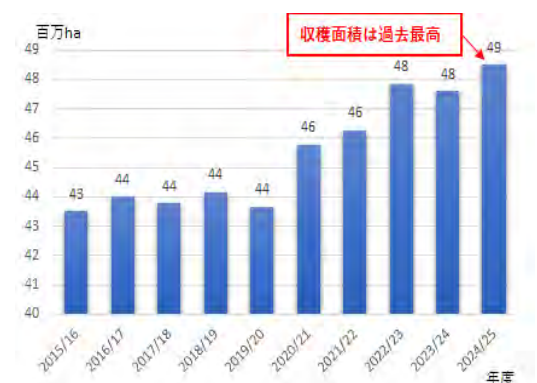
図 2：EU の降水量（平年対差）（2024. 8）

欧州南東部で降水量が不足



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図 3：インドのコメの収穫面積の推移



出典：USDA「PS&D」をもとに農林水産省で作成

3 中東：紅海における船舶航行の安全確保が困難なため回避

イスラエルとハマスの戦闘が継続する中、報道等によれば、2023年12月以降、イエメンの親イラン武装組織フーシ派が、地中海とインド洋をスエズ運河経由で結ぶ紅海を航行する商船を攻撃しており、海運各社は貨物輸送をアフリカ喜望峰経由等に迂回させている。

また、パナマ運河については、2023年7月以降、降雨不足による水位低下に伴い運航制限が実施された。通航枠は同年12月には1日当たり22隻まで制限されたが、雨季の到来に伴い順次制限を緩和、9月1日からは36隻まで増加させている。現在、通行枠についてはほぼ従来の状態（36隻程度）まで回復しているものの、依然として水の問題は残っており、パナマ運河庁は、パナマにある51の流域と湖からの代替水源を特定し、運河の運営に必要な水利用と貯蔵を最適化することにより、持続可能性を確保する解決策を模索している。

我が国の穀物輸入に関しては、小麦は主に米国・カナダ西海岸及び豪州から輸入しており、また、ブラジル産穀物等の多くは喜望峰経由で輸入していることから、上記2つのルートを通過しない。

一方、米国産のとうもろこし及び大豆は、メキシコ湾（ガルフ）からパナマ運河経由で輸入している場合が多いが、パナマ運河の通行料の高止まり等の影響により、米国西海岸（PNW）や喜望峰経由に切り替えている例がみられる。喜望峰経由の場合、ガルフからパナマ運河経由で輸入する場合と比較して2週間から3週間程度日数が嵩む。引き続き、今後の動向について注視が必要である。



II 2024 年 9 月の穀物等の国際価格の動向

小麦は、8 月末、190ドル/トン台半ばで推移。9 月に入り、EU及びロシアの作柄懸念や黒海周辺の緊張の高まり等から上昇し、9 月中旬現在、210ドル/トン近くで推移。

とうもろこしは、8 月末、140ドル/トン台後半で推移。9 月に入り、米国中西部の乾燥による作柄懸念を受けて150ドル/トン台半ばまで上昇したものの、豊作見通しの大豆に連れ安等で140ドル/トン台後半まで下落した。その後、黒海周辺の緊張の高まり等を受けて上昇し、9 月中旬現在、150ドル/トン台半ばで推移。

コメは、8 月末、610ドル/トン台前半で推移。9 月に入り、タイバーツ高にもかかわらず、インドネシアのタイ産米への需要減少が見込まれることから値を下げ、9 月中旬現在、590ドル/トン台前半で推移。

大豆は、8 月末、360 ドル/トン台前半で推移。9 月に入り、米国中西部における乾燥による作柄懸念及び米国産の新規の輸出成約報告等を受けて、370 ドル/トン台前半まで上昇したものの、米国産の豊作見通し等を受けて下落し、9 月中旬現在、360 ドル/トン台前半で推移。

(注) 小麦、とうもろこし、大豆はシカゴ相場（期近物）、コメはタイ国家貿易委員会価格

III 2024/25 年度の穀物需給（予測）のポイント

世界の穀物全体の生産量は、前年度より 0.6%増の 28.27 億トン。消費量は、前年度より 0.9%増の 28.40 億トンとなり、5 年連続で生産量が消費量を下回る見込み。

期末在庫量は前年度より減少し、期末在庫率も前年度を下回り 27.1%となる見込み（資料 2 参照）。

生産量は、前年度より、とうもろこしで減少も、小麦、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.27 億トンの見込み。

消費量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで増加し、穀物全体で増加となり、28.40 億トンの見込み。

貿易量は、前年度より、小麦、とうもろこし、コメで減少し、穀物全体で減少し、5.02 億トンの見込み。

期末在庫量は、7.68 億トンと前年度より減少、期末在庫率も、前年度より減少する見込み。

(注：数値は 9 月の USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」による)

IV 2024/25 年度の油糧種子需給（予測）のポイント

油糧種子全体の生産量は前年度を上回り 6.87 億トン。消費量は前年度を上回り 6.62 億トンとなり、前年度に引き続き、生産量が消費量を上回る見込み。

期末在庫量は、前年度より増加し、期末在庫率は前年度を上回る 22.8%となる見込み。

(注：数値は 9 月の USDA「Oilseeds : World Markets and Trade」等による)

V 今月の注目情報: 豪州及びカナダの穀物等の生産・輸出動向

エルニーニョ現象による乾燥の影響を受けた2023/24年度に比べ、生産量の増加が見込まれる豪州の小麦、大麦、菜種や、干ばつの影響を受けた2023/24年度に比べ、増産が見込まれるカナダの小麦や菜種などに関し、2024/25年度の生産・輸出動向等についてまとめた。

注：文中の「2024/25 年度」等は市場年度で、豪州の小麦は2024 年10 月から2025 年9 月、カナダの小麦は2024 年8 月から2025 年7 月。国や作物によって異なる(品目別需給編 P. 27 参照)。

1 豪州の生産・輸出動向

(1) 生産動向

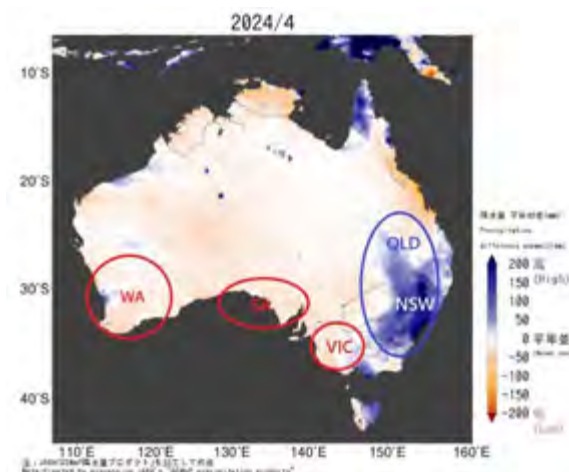
豪州農業資源経済科学局（ABARES）の「Australian Crop Report」（2024.9.3）によれば、2024/25 年度の冬作物の生産量はエルニーニョ現象による乾燥の影響を受けた前年度に比べ 17%増加し、5,520 万トンなる見込み。これは、過去 10 年平均を 17%上回り、過去 5 番目に高い水準となる。作付面積は、主にニューサウスウェールズ州（NSW 州）及びクイーンズランド州（QLD 州）の増加を背景に、前年度から 5 %増加し 2,400 万ヘクタールとなる見込み。これは、過去最高を記録した 2020/21 年度及び 2021/22 年度をわずかに下回るものの、過去 10 年平均を 9 %上回る水準。

2024/25 年度の小麦の生産量は 3,180 万トンと、前年度から 23%増加し、過去 10 年平均を 20%上回る見込み。NSW 州及び QLD 州では 4 月の作付期に平年を上回る降水量に恵まれ、NSW 州では前年度比 55%増、QLD 州では同 94%増と大幅な増産が見込まれる。一方、ウエスタンオーストラリア州（WA 州）、ビクトリア州（VIC 州）、サウスオーストラリア州（SA 州）では、乾燥型の天候に見舞われた（図 1）。WA 州では、北部及び西部地域で 7 月以降の降雨により作柄が改善したものの、南部及び東部の一部地域では乾燥型の天候が続いており作柄の悪化が懸念されている。また、VIC 州及び SA 州では、生育期間を通じて乾燥型の天候が続き、生産量の減少が見込まれている。

2024/25 年度の大麦の生産量は 1,220 万トンと、前年度から 13%増加し、過去 10 年平均を 7 %上回る見込み。これは 2023 年 9 月の中国向け大麦の輸出再開により、大麦の作付面積が増加したことが影響している。

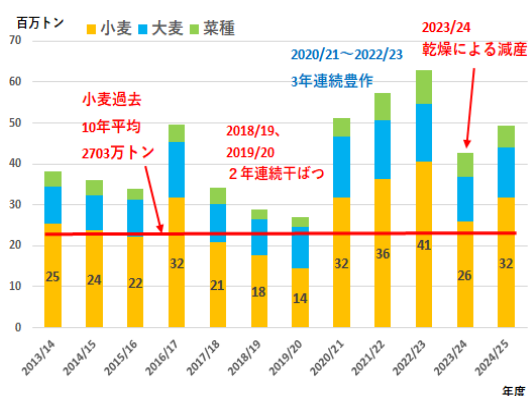
2024/25 年度の菜種の生産量は 550 万トンと、作付面積の減少により、前年度から 8 %減少する見込み。なお、作付面積は依然として過去 10 年平均を 15%上回っており、生産量も過去 10 年平均を 22%上回る水準とな

図 1 豪州の降水量(平年対差) (2024. 4)
NSW 州及び QLD 州で十分な降水量
WA 州、VIC 州、SA 州で乾燥天候



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

図 2 豪州の小麦、大麦、菜種の生産量の推移



出典：ABARES「Australian Crop Report」（2024.9）
をもとに農林水産省で作成

っている。

(2) 輸出動向

小麦について、豪州の主要輸出先は中国、インドネシア、ベトナム等のアジア諸国である。中国は豪州にとって最大の輸出先国であり、近年は常に小麦輸出の4分の1程度を占めている（図3）。USDAによれば、2020/21年度から2022/23年度まで3年連続の豊作により輸出量が大きく増加したものの、2023/24年度はエルニーニョ現象の影響による減産から輸出量が減少した。一転、2024/25年度はエルニーニョ現象の終息に伴い生産量が増加し、輸出量も2,500万トンと前年度から25%増加する見込み。

大麦について、2019/20年度以前は中国は豪州にとって主要な輸出先国であったが、2020年5月、中国が豪州産大麦に対し73.6%のアンチダンピング関税及び6.9%の相殺関税を課したことにより中国向けの輸出が激減した。2023年8月、中国は国内の大麦市場状況の変化により関税を撤廃。その後、中国向け大麦輸出は急速に回復している（図4）。USDAによれば、2024/25年度の輸出量は630万トンと、前年度から11%減少し、過去10年平均を2%下回る見込み。これは中国の旺盛な大麦需要による2023/24年度の輸出増から2024/25年度の期首在庫が減少し、同年度の供給量が減少することによる。

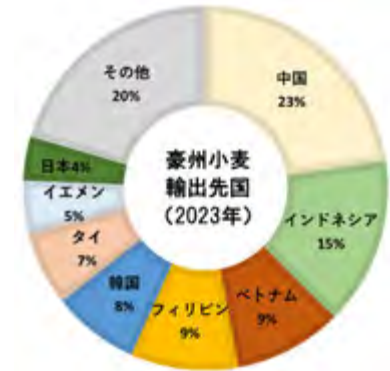
菜種について、豪州はカナダに次ぐ世界第2位の輸出国であり、近年では世界貿易の20~40%を占めている。主要輸出先国は、主にバイオディーゼル用途のEUが約4割を占め、次いで日本、アラブ首長国連邦、パキスタン、メキシコ等となっている（図5）。USDAによれば、2024/25年度の輸出量は475万トンと、前年度から7%減少するものの、過去10年平均を38%上回っている。

2 カナダの生産・輸出動向

(1) 生産動向

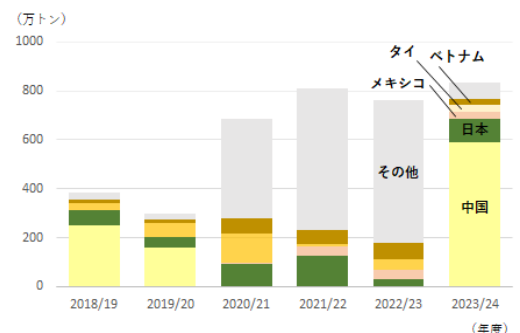
カナダ農務農産食品省（AAFC）「Outlook for Principal Field Crops」（2024.9.25）によれば、2024/25年度の小麦の生産量は3,429万トンと、干ばつの影響を受けた前年度に比べ4%増加する見込み。これはデュラム小麦の生産量が603万トンと前年度から48%増加することが主要因であり、普通小麦は2,826万トンと前年度から2%減少する見込みとなっている。デュラム小麦については、主産地の平原州で7月を通して高温乾燥型の天候

図3 豪州の小麦輸出先国（2023年）



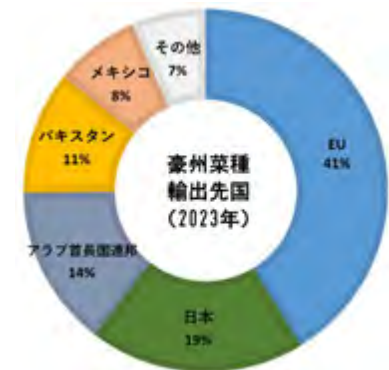
出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

図4 豪州の大麦輸出量の推移



出典：豪州統計局のデータをもとに農林水産省で作成
注：年度は豪州の会計年度

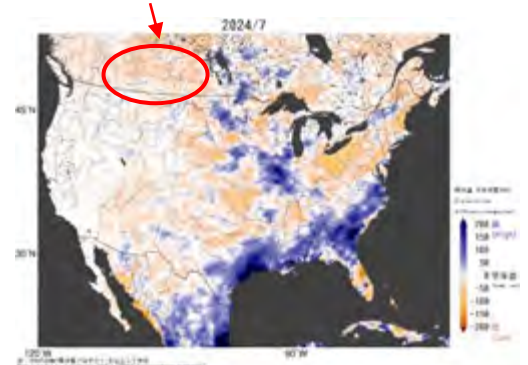
図5 豪州の菜種輸出先国（2023年）



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

図6 カナダの降水量(平年対差) (2024. 7)

平原州で高温乾燥天候



出典：農業気象情報衛星モニタリングシステム（JASMAI）

が続いたことにより作柄が悪化したものの、単収は干ばつの影響を受けた前年度から 40%上回ることから、生産量は前年度を 48%上回る見込み。普通小麦についてもデュラム小麦と同様、7月の高温乾燥（図6）により作柄が悪化したものの、単収は前年度を 1%上回る見込み。作付面積が前年度に比べ 3%減少したことを主要因とし、生産量は前年度を 2%下回る見込み。

2024/25年度の大麦の生産量は760万トンと、前年度から 15%減少する見込み。作付面積が前年度を 13%下回ったことを主要因とする。大麦の主産地は小麦と同様、アルバータ州とサスカチュワン州であり、7月の高温乾燥により作柄が悪化し、単収は前年度を 0.3%下回る見込み。

2024/25年度の菜種の生産量は1,898万トンと、前年度から 1%減少する見込み。作付面積は 891 万ヘクタールと、作付期の土壤水分量の不足により前年度から 0.4%減少した。単収は 2.15 トン/ヘクタールと前年度を 1%下回る見込み。

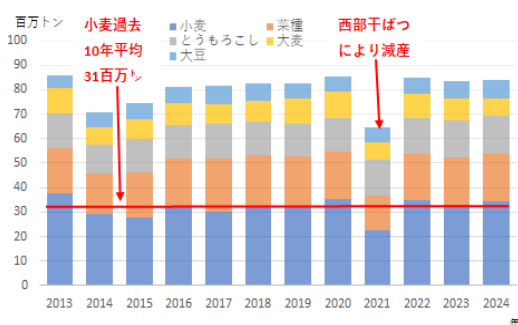
2024/25年度のとうもろこしの生産量は 1,517 万トンと、前年度から 2%減少する見込み。これは、とうもろこし価格の低下による大豆への作付けシフトにより、作付面積が 148 万ヘクタールと、前年度から 5%減少することによる。主産地のオンタリオ州及びケベック州では平年を上回る降雨に恵まれ、単収は 10.53 トン/ヘクタールと前年度を 4%上回る見込み。

2024/25年度の大豆の生産量は720万トンと、前年度から 3%増加する見込み。これは、堅調な搾油需要と輸出需要、良好な土壤水分量、とうもろこし価格の低下による作付けシフトにより、作付面積が 232 万ヘクタールと、前年度から 2%増加することによる。

（2）輸出動向

小麦について、カナダの主要輸出先は、中国、インドネシア、日本等のアジア向け、米国、ペルー、コロンビア等の北・中米、アルジェリア等のアフリカ向け、イタリア等の欧州向けと多岐にわたっており（図8）、ロシア、EU に次ぐ世界第3位の輸出国である。2024/25年度の小麦の輸出量は、干ばつによる減産から輸出量が減少した前年度からわずかに回復し、0.2%増の 2,530 万トンとなる見込み。これはデュラム小麦の輸出量が 480 万トンと前年度から 38%増加することが主要因であり、普通小麦は2,050万トンと前年度から 6%減少する見込みとな

図7 カナダの主要穀物・油糧種子生産量の推移



出典：カナダ統計局のデータをもとに農林水産省で作成

写真1 サスカチュワン州の小麦（2024. 7. 3）



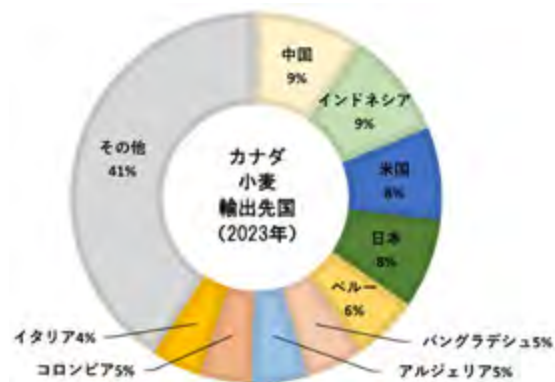
撮影：カール・デコニックスミス氏

写真2 オンタリオ州の大豆（2024. 7. 2）



撮影：マーク・マクレーン氏

図8 カナダの小麦輸出先国（2023年）



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

っている。

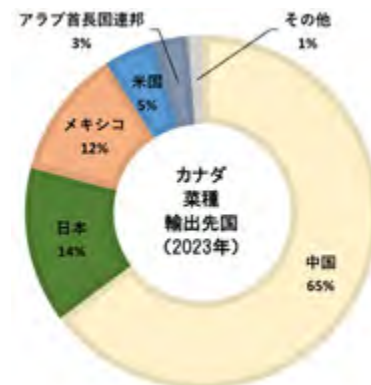
大麦について、2024/25年度の輸出量は、期首在庫量と生産量の減少により供給量の減少が見込まれるため、前年度から17%減少し275万トンとなる見込み。

菜種について、カナダは世界最大の輸出国であり、主要輸出先は、中国が全体の約7割を占め、次いで日本、メキシコ等となっている（図9）。2024/25年度の菜種の輸出量は、期首在庫の増加により供給量の増加が見込まれるため、前年度から12%増加し750万トンとなる見込み。

とうもろこしについて、2024/25年度の輸出量は、世界的にとうもろこし供給が潤沢となる中、前年度並みの200万トンとなる見込み。また、輸入量は前年度から3%減少し290万トンとなる見込み。カナダはとうもろこしのほぼ全量を米国から輸入している。

大豆について、カナダは世界第5位の輸出国であり、主要輸出先は、中国が3割以上を占め、次いでイラン、アルジェリア、日本、インドネシア等となっている（図10）。2024/25年度の大豆の輸出量は、中国の堅調な需要により前年度から2%増加し500万トンとなる見込み。

図9 カナダの菜種輸出先国（2023年）



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

図10 カナダの大豆輸出先国（2023年）



出典：Global Trade Atlas をもとに農林水産省で作成

3 今後の動向

2024/25年度は、豪州、カナダともに、概ね生育に適した天候に恵まれ、生産量の増加が見込まれる年となった。気象庁によれば、現在、エルニーニョ現象もラニーニャ現象も発生していない平常の状態にあるが、11月以降、ラニーニャ現象が発生する確率は70%となるとみられる。豪州では、前回ラニーニャ現象が発生した2020年から2022年の間、降雨に恵まれ過去最高の生産量を記録しており、今後の天候状況に注目したい。

豪州の小麦及び大麦、カナダの小麦、大麦、菜種、大豆の最大輸出先はいずれも中国であり、中国の輸入動向は両国の輸出に大きな影響を与えている。

2020年5月、中国政府は豪州産大麦に対し73.6%のアンチダンピング関税及び6.9%の相殺関税を課した。これにより2020年以降、豪州の中国向け大麦輸出は激減したが、2023年8月、中国がこれらの関税を撤廃したことにより、中国向け大麦輸出は急速に回復している。

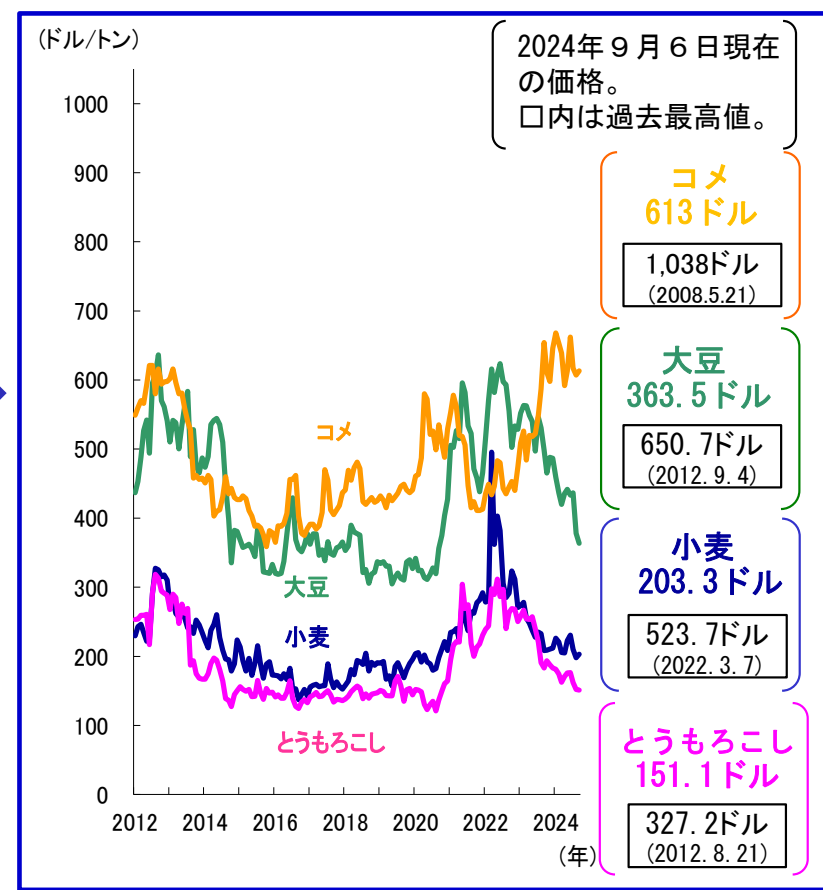
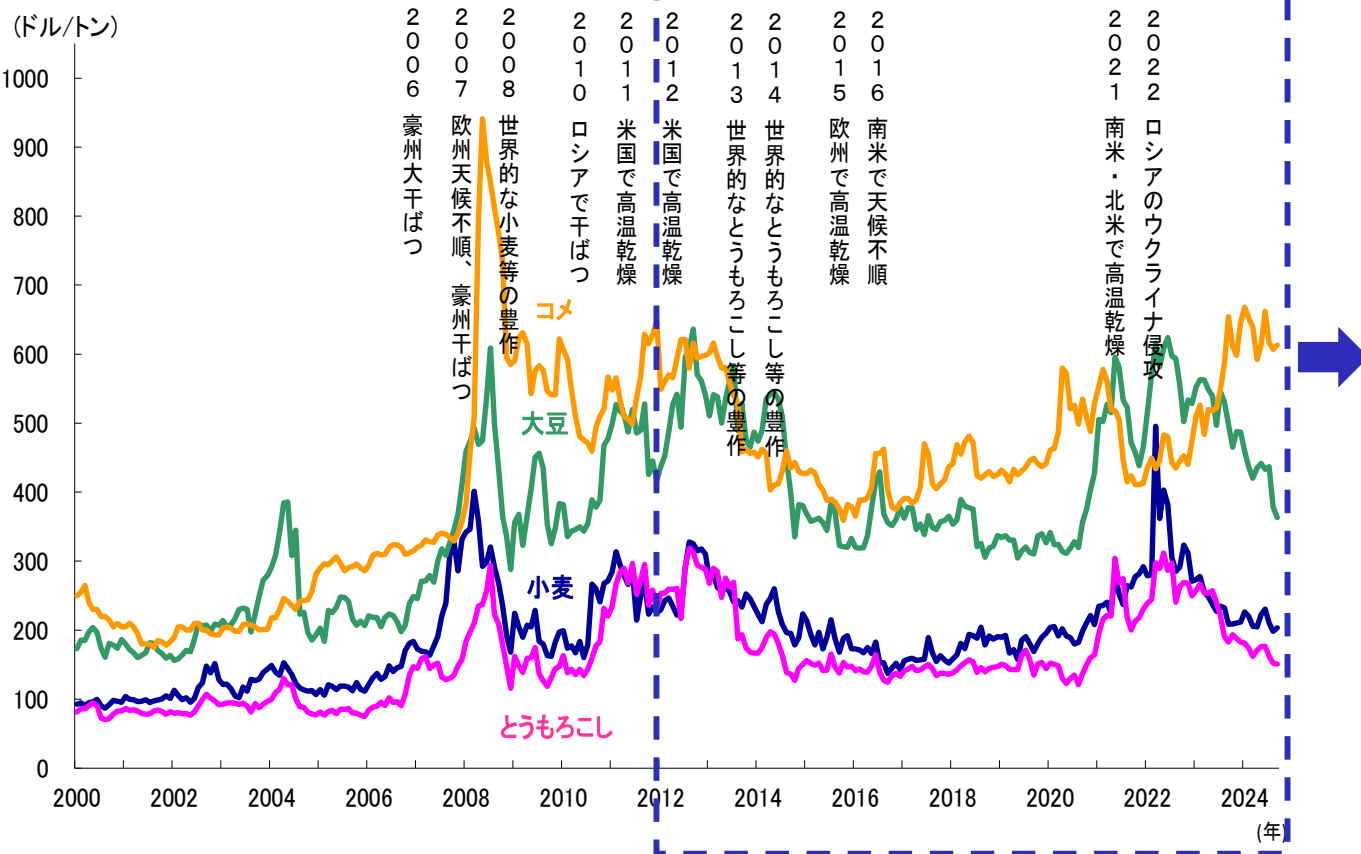
2024年9月9日、中国政府はカナダ産菜種に対するアンチダンピング調査を開始すると発表した。カナダが中国から輸入する電気自動車（EV）や鉄鋼・アルミニウム製品に追加関税を課したことへの対抗措置とみられる。カナダは菜種生産量の半分以上を中国向けに輸出しており、アンチダンピング関税が課されることとなればその影響は大きい。

豪州の大麦、カナダの菜種、いずれも中国に次ぐ第2位の輸出先国は日本であり、中国の輸入動向を含め、豪州・カナダの穀物需給の動向を注視していきたい。

資料 1 穀物等の国際価格の動向（ドル/トン）

- とうもろこし、大豆が史上最高値を記録した2012年以降、世界的な豊作等から穀物等価格は低下。2020年後半から南米の乾燥、中国の輸入需要の増加、2021年の北米の北部の高温乾燥等により上昇。2022年、ロシアのウクライナ侵攻により、小麦は史上最高値を更新も、ウクライナからの臨時回廊等による輸出再開などもあり侵攻前の水準まで低下。一方で、とうもろこし、大豆はウクライナ侵攻時に高騰も、ブラジル等の豊作から侵攻前の水準まで低下。コメは、2013年以降低下で推移も、2022年9月以降、インドの輸出規制導入と強化、インドネシアのエルニーニョによる減産を受けた需要増等から上昇。
- 穀物等価格は、新興国の畜産物消費の増加を背景とした堅調な需要やエネルギー向け需要に加え、ウクライナ情勢により、2008年以前を上回る水準で推移。

□ 穀物等の国際価格の動向

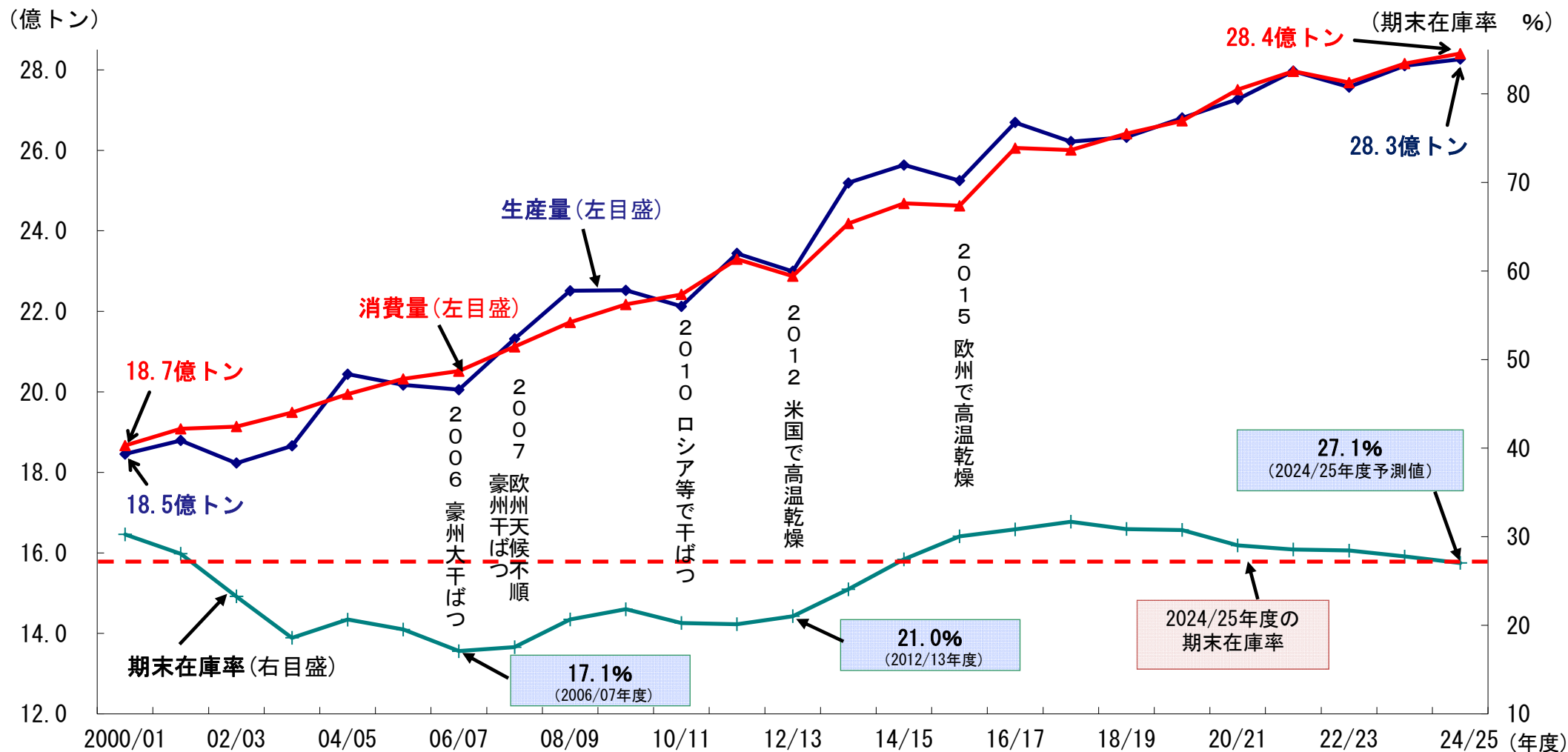


注1：小麦、とうもろこし、大豆は、シカゴ商品取引所の各月第1金曜日の期近終値の価格（セツルメント）である。コメは、タイ国家貿易取引委員会公表による各月第1水曜日のタイうるち精米100%2等のFOB価格である。
注2：過去最高価格については、コメはタイ国家貿易取引委員会の公表する価格の最高価格、コメ以外はシカゴ商品取引所の全ての取引日における期近終値の最高価格。

資料2 穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2024/25年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2024/25年度の期末在庫率は、消費量が生産量を上回り、前年度より減少し、27.1%。過去の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移

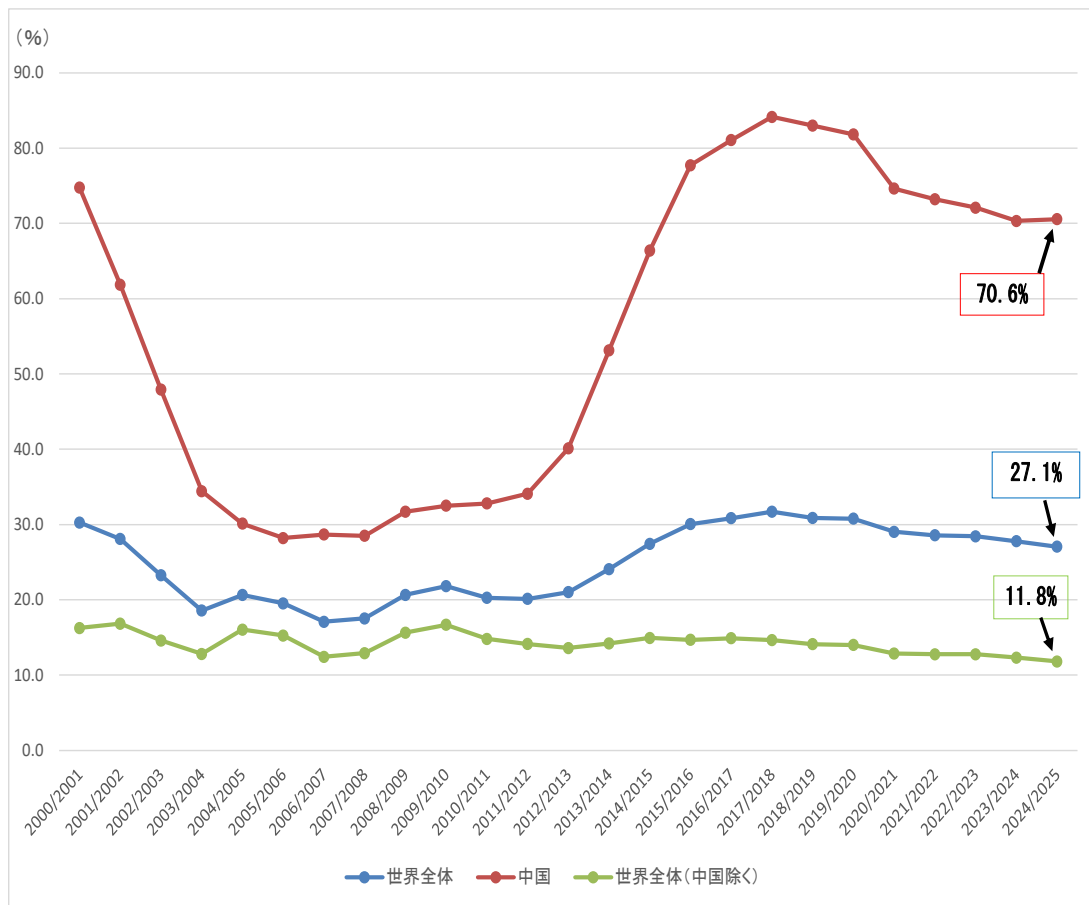


資料：USDA「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(September 2024)、「PS&D」

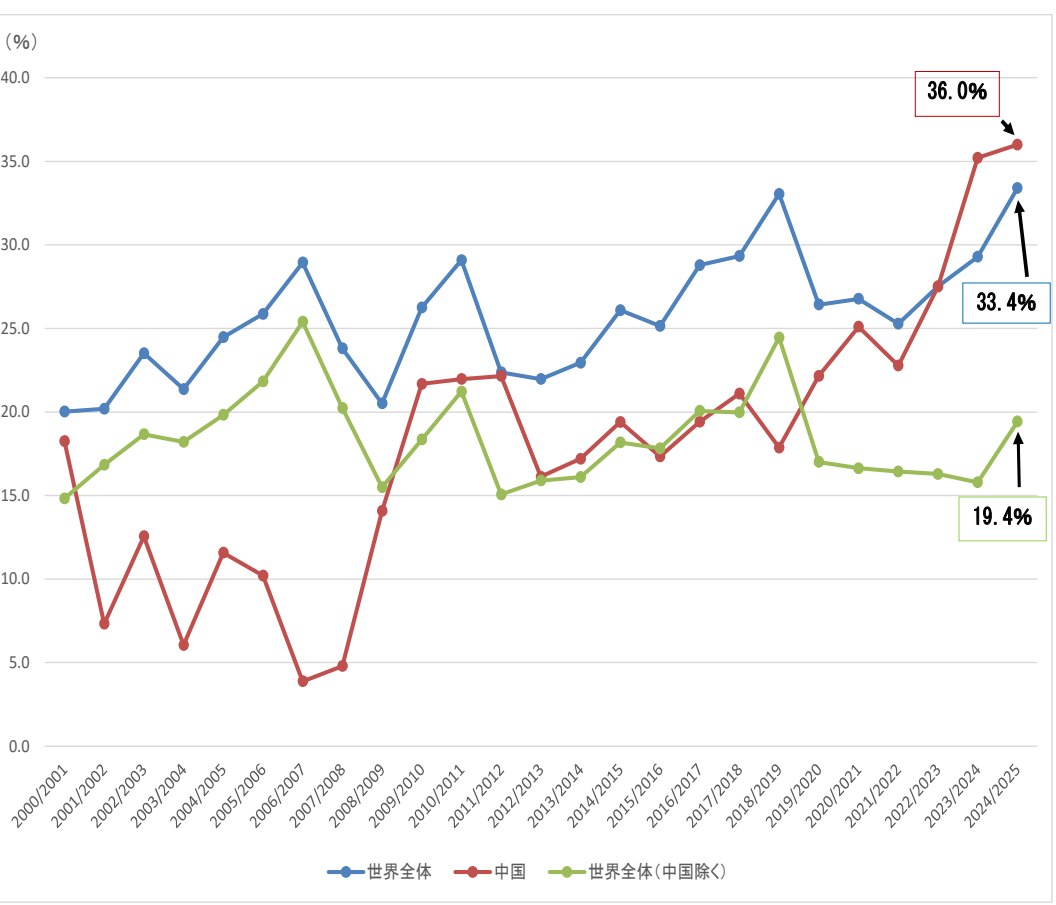
(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。

資料 3-1 穀物等の期末在庫率の推移（穀物全体、大豆）

○ 穀物全体の期末在庫率の推移



○ 大豆の期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(September 12, 2024)

注: 1) 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等(大豆除く)。

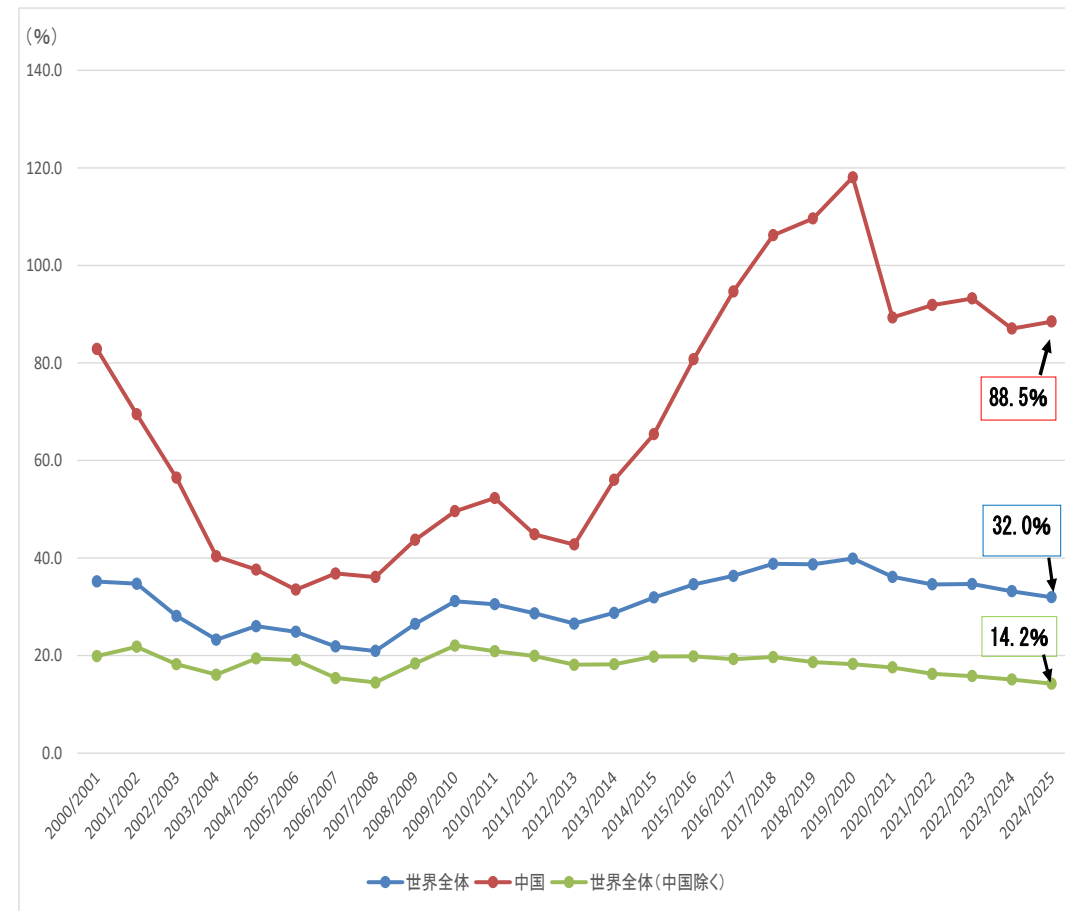
2) 世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / (消費量 + 輸出量 - 輸入量) × 100 ※ただし大豆については、世界の期末在庫率(%) = 期末在庫量 / 消費量 × 100

3) 中国の期末在庫率(%) = 中国の期末在庫量 / (中国の消費量 + 中国の輸出量) × 100

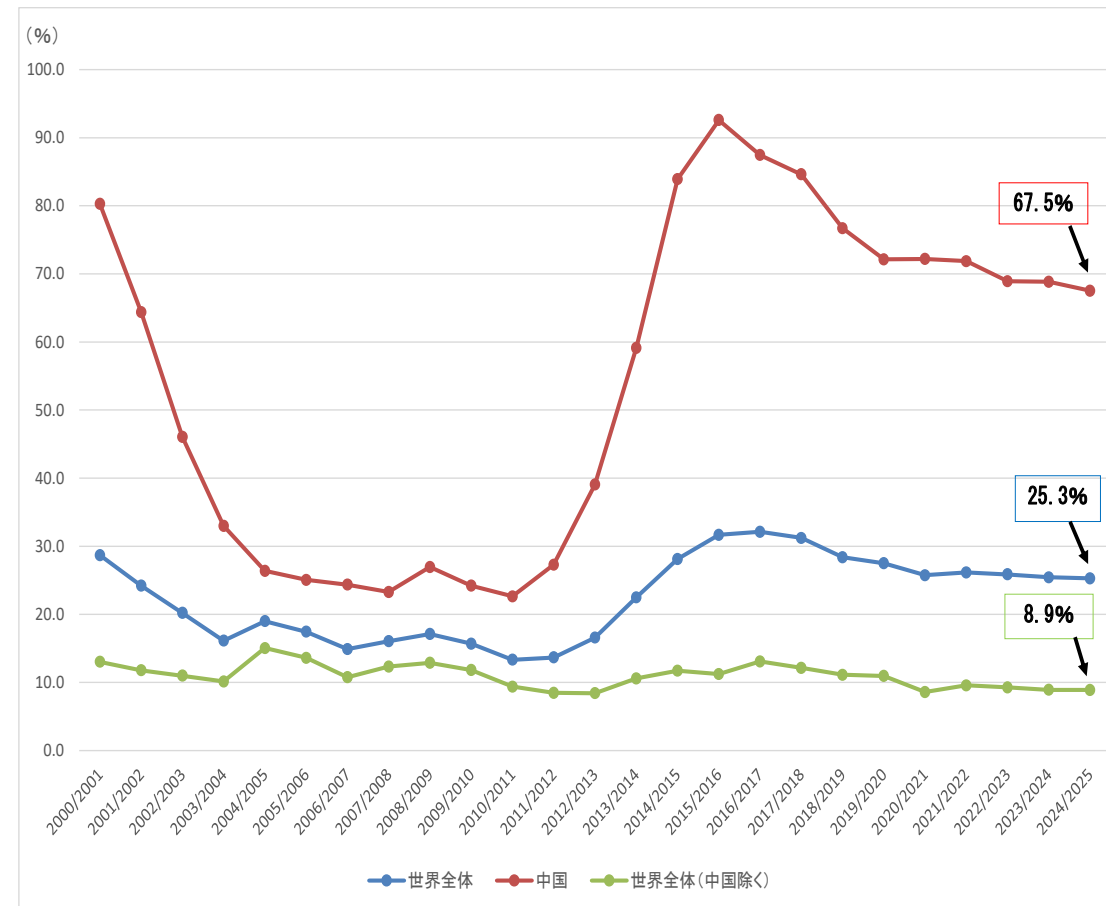
4) 中国除く期末在庫率(%) = 中国除く期末在庫量 / (中国除く消費量 + 中国除く輸出量) × 100

資料 3-2 穀物等の期末在庫率の推移（小麦、とうもろこし）

○ 小麦の期末在庫率の推移



○ とうもろこしの期末在庫率の推移



資料: 米国農務省「PS&D」(September 12, 2024)

注: 1)小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

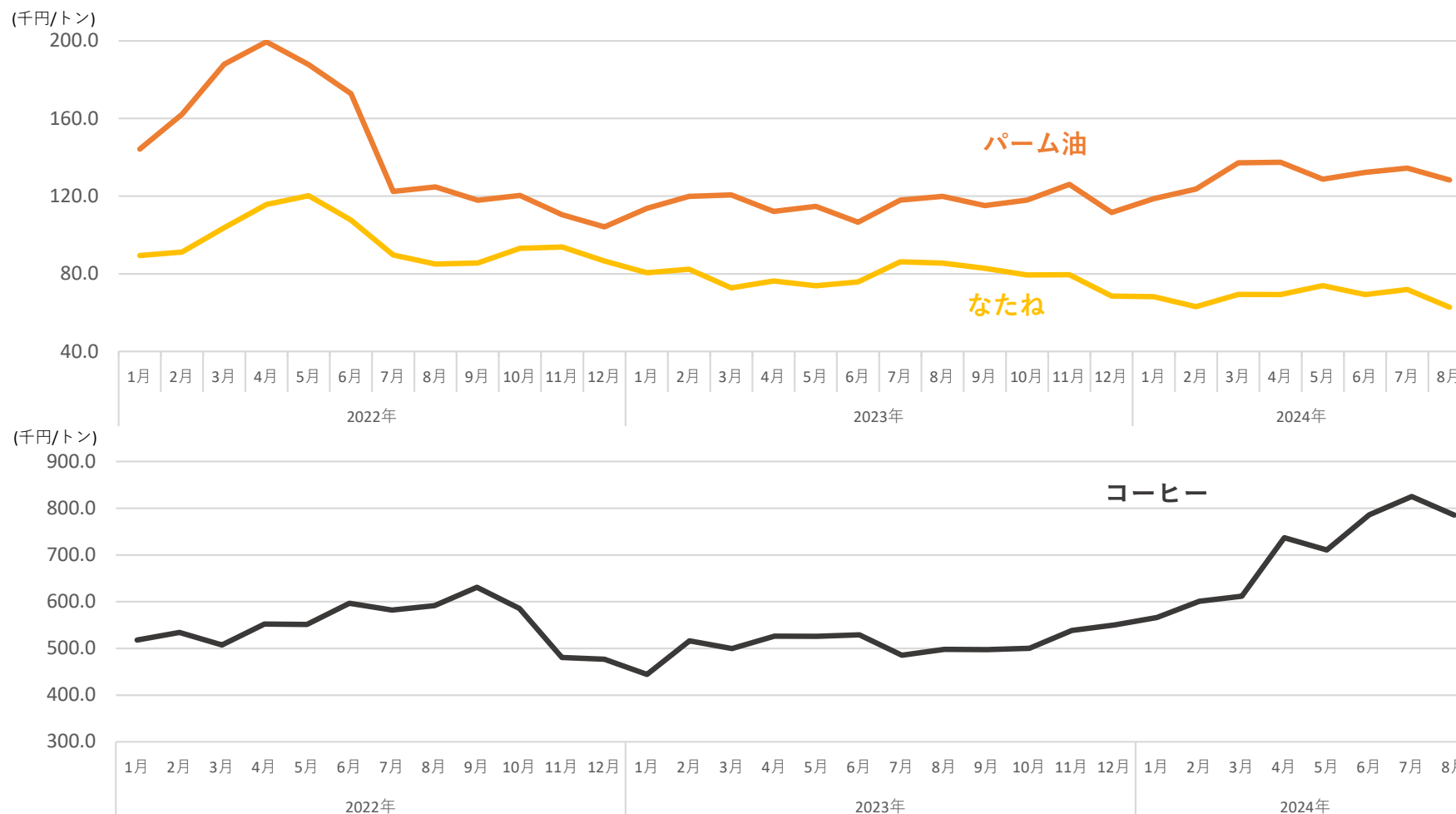
2)世界の期末在庫率(%)=期末在庫量/(消費量+輸出量-輸入量)×100

3)中国の期末在庫率(%)=中国の期末在庫量/(中国の消費量+中国の輸出量)×100

4)中国除く期末在庫率(%)=中国除く期末在庫量/(中国除く消費量+中国除く輸出量)×100

資料４－１ 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の動向

- なたね、パーム油の需要の面では、世界的な人口増加や中国等における所得水準の向上による食用油需要の拡大、エネルギー向け需要の増加などにより市場価格上昇の要因となっている。
- なたね、パーム油の供給の面では、なたねについては、**2021年**に主産地であるカナダで減産があったが、**2022年以降**は回復基調から平年並みの収量に近づいた。パーム油については、インドネシアの輸出禁止措置（**2022年5月23日解除**）があったが、マレーシアの生産量の増加によって供給不足の懸念が払拭された。いずれも**2022年**の高値からは落ち着きが見られるものの、依然高止まりしている。
- コーヒーについて、**2021年以降**、世界最大の生産国であるブラジルにおける天候不順による収穫量減少や世界的な物流の混乱等により、市場価格が上昇した。その後、消費地のインフレによる景況感の悪化やブラジルにおける収穫量の回復等により、市場価格は一時下降したが、ブラジルにおける天候不順やベトナムにおける干ばつによる収穫量減少等により、**2024年以降**は再び市場価格が高騰している。



2024年9月20日現在
□内は2022年1月以降の最高値。

パーム油
128.3千円/トン
199.5千円/トン
(2022.4)

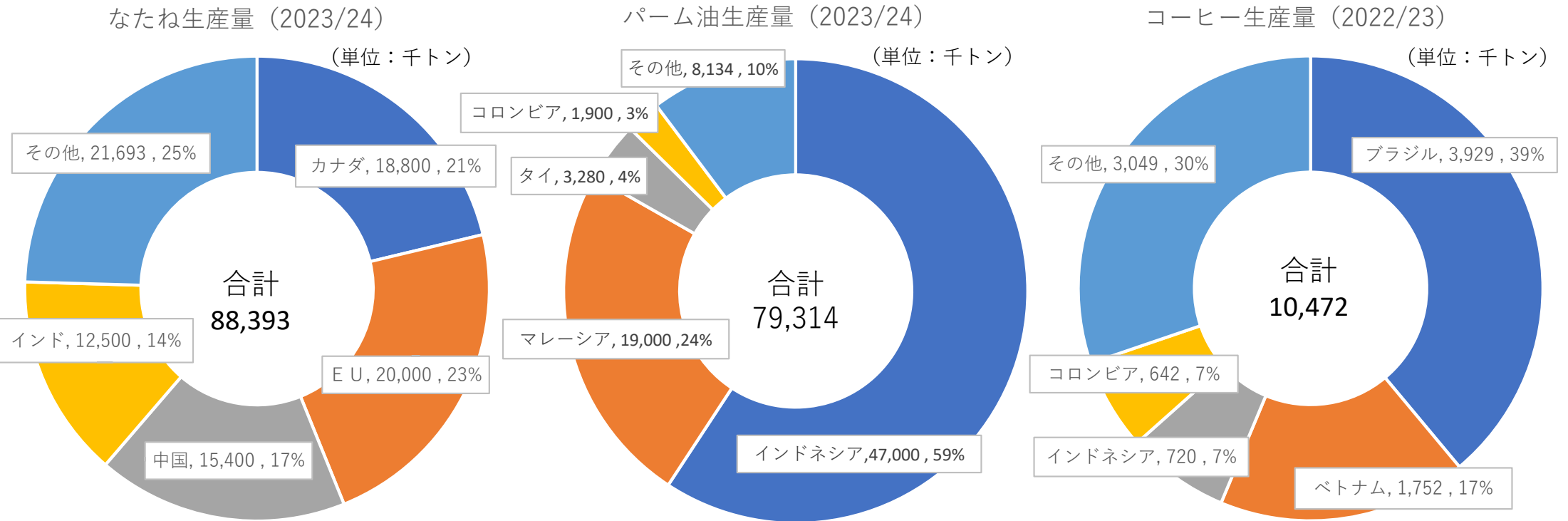
なたね
62.8千円/トン
120.3千円/トン
(2022.5)

コーヒー
785.5千円/トン
825.0千円/トン
(2024.7)

※ なたねの国際価格についてはカナダウィニペグ菜種市場の先物価格（期近物）を、パーム油の国際価格についてはマレーシアパーム油市場の先物価格（期近物）を、コーヒーの国際価格については国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均を用い、為替レートから円に換算して算出。

資料 4－2 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の生産量及び輸入先

○主要生産国の生産状況



※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※米国農務省（Oilseeds: World Markets and Trade）
2024年 6 月時点

※国際コーヒー機関（ICO）統計資料
2024年 6 月時点

○我が国の主な輸入先の状況（単位：千トン（2023年））

なたね	輸入量	割合	パーム油	輸入量	割合	コーヒー	輸入量	割合
カナダ	1,039	51.4%	マレーシア	574	85.6%	ブラジル	124	35.0%
オーストラリア	983	48.6%	インドネシア	96	14.4%	ベトナム	99	27.9%
その他	0	0.0%	その他	0	0.1%	コロンビア	34	9.6%
合計	2.022	100.0%	合計	671	100.0%	その他	98	27.6%

※財務省「貿易統計」（HSコード：1205）

※財務省「貿易統計」（HSコード：1511）

※財務省「貿易統計」（HSコード：0901.11～0901.12）

資料 4－3 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移①

①なたね

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
なたね	89.4	91.2	103.7	115.7	120.3	107.7	89.6	85.0	85.5	93.1	93.8	86.6	80.6	82.4	72.8	76.4	73.8	75.9	86.2	85.5	82.8	79.4	79.6	68.6	68.2	63.1	69.4	69.3	73.9	69.4	71.9	62.8				
前月比	100.6	102.0	113.8	111.5	104.0	89.5	83.3	94.8	100.6	108.9	100.8	92.3	93.1	102.2	88.3	105.0	96.7	102.7	113.6	99.2	96.9	95.9	100.2	86.1	99.5	92.5	109.9	99.9	106.6	93.8	103.7	87.3				
前年同月比	164.3	148.3	148.1	162.0	143.9	139.8	115.1	109.1	112.3	110.1	101.5	97.5	90.2	90.4	70.1	66.0	61.4	70.5	96.1	100.6	96.9	85.3	84.8	79.2	84.6	76.6	95.4	90.8	100.1	91.4	83.5	73.5				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 カナダウィニペグなたね定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

②パーム油

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
パーム油	144.2	162.2	188.0	199.5	187.8	172.8	122.4	124.7	117.9	120.4	110.4	104.2	113.7	119.9	120.6	112.1	114.7	106.5	117.9	119.8	115.1	118.0	126.1	111.6	118.7	123.7	137.2	137.4	128.7	132.2	134.4	128.3				
前月比	112.5	112.4	115.9	106.1	94.1	92.0	70.9	101.9	94.5	102.1	91.7	94.4	109.1	105.4	100.7	93.0	102.3	92.9	110.7	101.6	96.1	102.4	106.9	88.5	106.4	104.2	110.9	100.2	93.7	102.7	101.7	95.4				
前年同月比	155.0	157.5	166.6	184.4	151.2	177.3	110.5	103.7	98.1	85.9	77.0	81.3	78.8	73.9	64.2	56.2	61.1	61.7	96.3	96.1	97.7	98.0	114.2	107.1	104.4	103.2	113.7	122.6	112.2	124.1	114.0	107.1				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 マレーシアパーム油定期相場の各月の月央値（期近物）から算出

資料 4－4 加工食品の主な輸入原材料（穀物等を除く）の国際価格の推移②

③コーヒー

単位（千円/トン）

	2022年												2023年												2024年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
コー ヒー	517.9	534.1	507.5	552.1	551.2	596.8	582.3	591.6	631.1	585.4	480.6	477.0	444.4	516.3	499.6	526.2	526.1	529.1	485.5	498.1	497.4	500.3	538.5	550.2	566.3	601.1	611.7	737.0	710.8	786.3	825.0	785.5				
前月 比	100.6	103.1	95.0	108.8	99.8	108.3	97.6	101.6	106.7	92.8	82.1	99.2	93.2	116.2	96.8	105.3	100.0	100.6	91.8	102.6	99.9	100.6	107.6	102.2	102.9	106.2	101.8	120.5	96.5	110.6	104.9	95.2				
前年 同月 比	194.1	190.6	172.9	188.0	169.5	172.9	158.3	152.4	151.4	128.4	98.8	92.7	85.8	96.7	98.5	95.3	95.4	88.7	83.4	84.2	78.8	85.5	112.0	115.4	127.4	116.4	122.4	140.1	135.1	148.6	169.9	157.7				

大臣官房新事業・食品産業部食品製造課調べ
注1 国際コーヒー機関（ICO）の複合指標価格月次平均から算出
2 ICO複合指標価格は、米国、ドイツ、フランスの3大市場の現物の成約価格を収集しICOの定める方法で4品種ごとの加重平均値を算出したもの。

資料5 食品小売価格の動向

○ 令和6年8月の国内の加工食品の消費者物価指数は113.7～151.8（前年同月比で-6.8%～7.1%）の範囲内。

消費者物価指数（総務省） （令和6年3月～令和6年8月）

	R2	R3	R4	R5	R6						
品目	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.0	99.2	110.3	118.7	122.1	121.9	121.7	122.0	122.4	122.6	-0.2%
即席めん	100.0	100.1	107.6	119.7	123.9	123.5	124.6	121.4	122.9	124.3	-1.2%
豆腐	100.0	101.3	105.3	114.6	117.6	118.0	117.9	117.9	118.1	117.9	1.7%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	106.9	144.4	160.2	148.3	148.0	147.8	149.0	146.8	148.1	-6.8%
みそ	100.0	99.3	101.3	108.1	112.9	113.3	113.2	113.8	113.4	113.7	5.7%
マヨネーズ	100.0	105.6	125.6	149.5	153.4	153.7	153.4	152.3	152.7	151.8	-2.5%
チーズ	100.0	98.7	107.5	131.1	134.5	135.3	130.5	132.6	132.3	135.4	-0.6%
バター	100.0	99.9	99.2	108.6	118.8	120.2	120.5	120.0	119.6	120.1	7.1%
生鮮食品を 除く食料	100.0	100.2	104.1	112.6	115.3	115.5	115.7	115.9	116.3	117.1	2.9%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

資料: 総務省消費者物価指数

【参考】 食品価格動向調査（農林水産省） （令和6年3月～令和6年9月）

	R2	R3	R4	R5	R6								
品目	平均	平均	平均	平均	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	
												上昇率 (前月比)	上昇率 (前年 同月比)
食パン	100.0	98.6	107.8	114.5	118.6	115.0	117.8	118.9	118.2	118.6	118.9	0.3%	0.0%
即席めん	100.0	99.2	105.6	117.5	121.0	117.3	119.8	114.9	121.0	120.4	119.1	-1.1%	-2.0%
豆腐	100.0	100.6	103.7	113.0	115.0	118.9	116.7	115.0	115.9	115.9	116.7	0.7%	1.1%
食用油 (キャノーラ油)	100.0	104.1	140.7	159.4	150.5	145.1	145.1	144.1	142.9	145.1	143.5	-1.1%	-8.6%
みそ	100.0	99.2	100.1	105.9	110.2	106.7	108.1	109.2	110.0	109.8	110.2	0.4%	4.4%
マヨネーズ	100.0	102.2	117.7	139.8	143.4	140.3	138.6	141.3	140.3	140.6	141.3	0.5%	-2.2%
チーズ	100.0	98.1	105.7	126.5	129.8	123.8	121.3	127.8	129.3	129.3	128.8	-0.4%	-1.1%
バター	100.0	99.8	99.1	108.0	118.5	119.7	119.4	119.7	119.7	119.7	118.8	-0.8%	7.5%

注1: 令和2年の平均値を100とした指数で表記。

注2: 調査は原則、各都道府県10店舗で実施。平成30年9月までは週1回、同年10月以降は月1回実施。

注3: 調査結果は調査期間中の平均値で算出。

注4: 令和2年4～5月、令和3年1～3月、同5～9月については、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言の対象都道府県においては調査を中止。そのためそれぞれ前月の値とは接続しない。

資料 6-1 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

○独立行政法人農畜産業振興機構（ALIC）は毎月25日頃に海外の畜産物の需給動向を公表（月報 畜産の情報）

○2024年10月号（9月25日に公表）の各品目の主な動きは以下の通り

『月報 畜産の情報』

◆牛肉

（米国）肥育牛価格は高値で推移、フィードロット飼養頭数は前年並み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003411.html

（豪州）24年8月の牛肉輸出量、生産増と海外需要増を背景に過去最高を記録

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003412.html

（ブラジル）24年の牛肉生産量は3年連続の増加で過去最大の見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003413.html

◆豚肉

（米国）24年6月の輸出量、米ドル高の影響により前年同月比10.2%減

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003414.html

（EU）24年1～5月の豚肉生産量はやや増加、豚肉卸売価格は下落

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003415.html

（中国）24年7月の豚肉価格は前年同月比24.4%高

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003416.html

資料 6-2 海外の畜産物の需給動向（ALIC提供）

◆牛乳・乳製品

（EU）24年上半期の生乳出荷量、前年同期をわずかに上回る

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003420.html

（豪州）23/24年度の生乳生産量は増加、主要乳製品輸出量も全粉乳を除き増加

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003421.html

（NZ）GDT平均価格が大きく上昇、24/25年度の生産者支払乳価は引き上げへ

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003422.html

※GDT価格…グローバルデイリートレード価格

◆飼料穀物

（世界：トウモロコシ）米国などの増産見込みを受けて、期末在庫は高水準の見通し

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003423.html

（世界：大豆）米国の生産増などから、大豆の期末在庫は大幅な増加見込み

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003424.html

（米国）米国は単収増加で生産量は上方修正、輸出量も2年ぶりの高水準

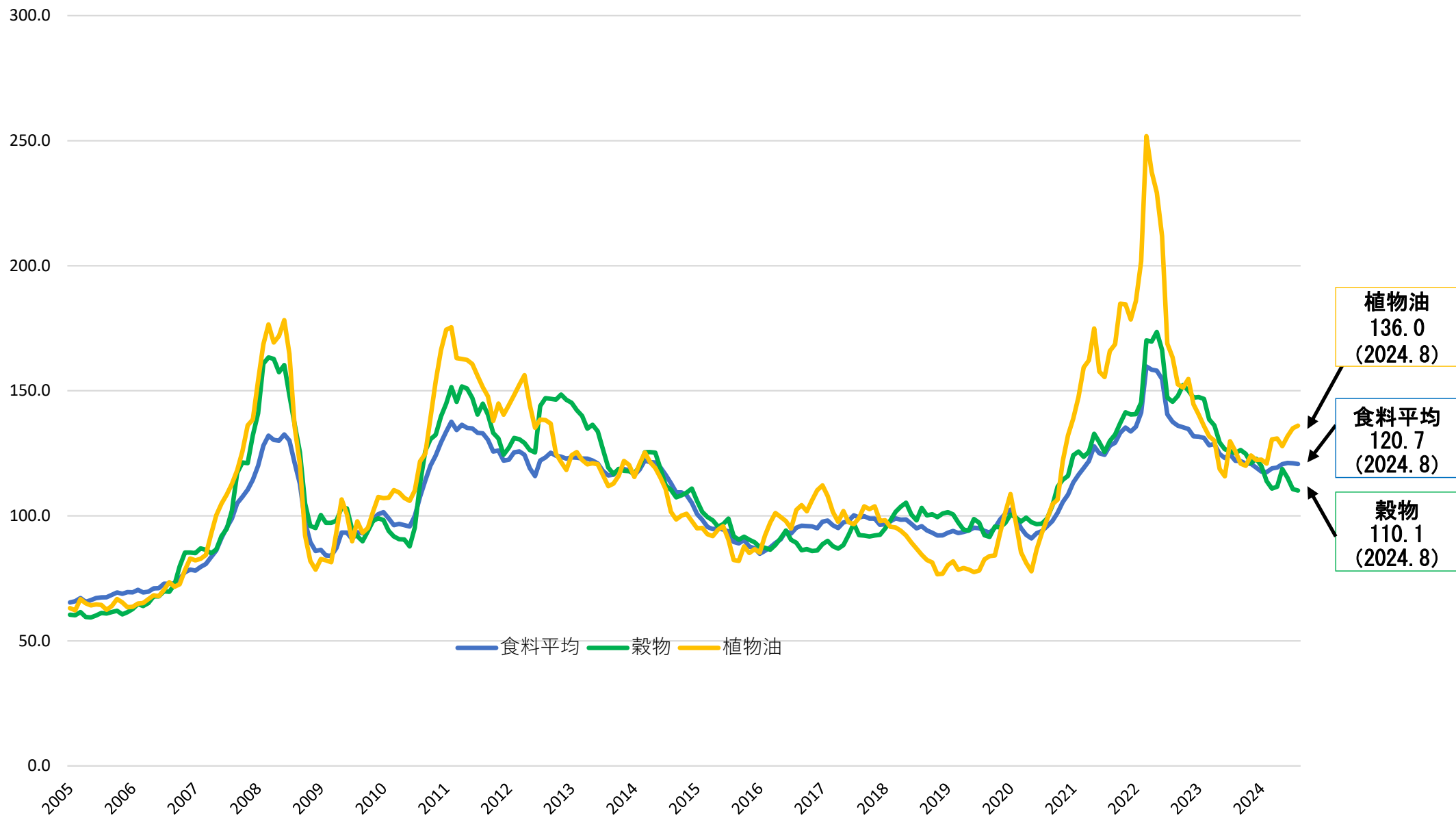
https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003425.html

（中国）トウモロコシおよび大豆の価格動向

https://www.alic.go.jp/joho-c/joho05_003426.html

資料 7 FAO食料価格指数

(2014-16平均=100)



資料: FAO「Food Price Index」(2024.8)より作成

注: 穀物はとうもろこし、小麦、コメ等、植物油は大豆油、菜種油、ひまわり油、パーム油等

【今月のコラム】

アルゼンチンのローカルフード事情について

南米でブラジルに次いで二番目に面積の大きいアルゼンチンは、パンパと呼ばれる肥沃な土地を利用した穀物栽培や畜産業が盛んな国です。日本はアルゼンチンから飼料用とうもろこしを輸入するなど、我が国の食料安全保障上、重要な国の一つになります。

ブエノスアイレス市内のレストランでは、小麦粉の生地には牛肉など様々な具材を包んで焼き上げたエンパナダと呼ばれるローカルフードやアサードといったアルゼンチン流 BBQ 等の伝統料理のほか、日本食や中華料理等の多国籍料理を気軽に楽しむことができます。

今回、ご紹介させていただくのは、アルゼンチンのローカルフードの一つである、ミラネーザです（写真1）。日本だと、ミラノ風カツレツと呼ばれていますが、日本での呼び名の通り、イタリア料理です。アルゼンチンはイタリア系の移民が多いこともあり、パスタやピザなど街中のレストランで気軽に楽しむことができますが、ミラネーザは、数あるイタリア料理の中でもアルゼンチンで市民権を獲得している料理の一つに入っているのではないかと思います。アルゼンチンは世界でも有数の肉牛生産国であり、その国民の牛肉消費量は日本の約7倍の44.8キログラムと、とても多いです（図1）。このように日常的に牛肉を食べる食習慣が根付いていることから、ミラネーザが庶民には受け入れられていたのではないかと思います。ソースはお好みでケチャップやマスタードをつけて食べますが、ミラネーザにもいくつか種類があり、例えば、トマトソースとチーズがマルゲリータのようにミラネーザの表面に目一杯にトッピングされているのが、ナポリタンミラネーザです（写真2）。ミラネーザだけに限ったものではないですが、メインの料理と一緒に、よくポテトが添えられているのが定番です。また、アルゼンチンでは、牛肉だけでなく、豚肉や鶏肉のミラネーザもあり、日本でいう、トンカツ、チキンカツにあたります。

レストランでは、ミラネーザ単品で提供されるところをよく見かけますが、ブエノスアイレス市内のサンドイッチ屋では、ミラネーザサンドが売られています（写真3）。これはご想像の通りで、パンにミラネーザを挟んであるものですが、レタスやトマトなどの野菜も一緒にサンドされています。ミラネーザサンドに限った話ではないですが、アルゼンチンのサンドイッチはとにかくパンが大きく、ボリューム満点なのが特徴です。アルゼンチンといえばサッカーが人気のスポーツですが、プロの試合があると、スタジアム周囲の道端にはキッチンワゴンが軒を連ね、ミラネーザサンドやホットドッグなどを試合後に買って食べ歩きながら帰るサポーターたちを見かけることができます。また、ミラネーザは、外食だけでなく、家庭でもよく食べられています。街中の精肉店に行くと、生鮮の生肉と共に、ショーケースにパン粉と小麦粉が塗られた状態のミラネーザがよく売られており、自宅でも手軽に調理をすることができます（写真4）。

アルゼンチンは、まだまだ他にもたくさんの庶民に親しまれている美味しいローカルフードがありますので、皆さんも、チャンスがあれば是非アルゼンチンのローカルフードを体験してみてください。

文責：山路拓也（在アルゼンチン日本大使館（農業・経済協力担当））



写真1：ミラネーザ



写真2：ナポリタン
ミラネーザ

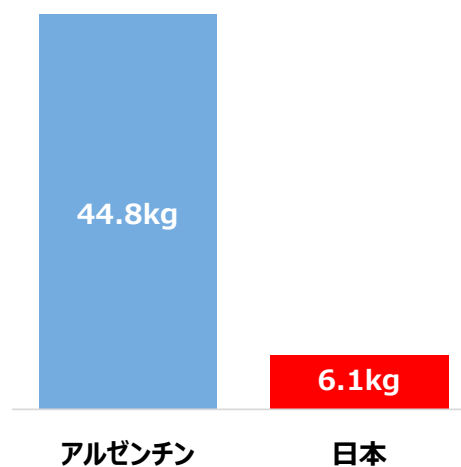


写真3：ミラネーザ
サンド



写真4：精肉店

図1 1人1年当たり牛肉供給量



【データ・出典】

ロサリオ穀物取引所

農林水産省「食料需給表」

本稿は、世界各国・地域の駐在員の方々にご協力をいただき、最新の現地情報をご紹介しますものです。日本とは異なる文化や経済、国土条件等を背景として、それぞれの国や地域における食料の生産、流通、消費の特徴や考え方、また、日本の食料品や文化等に対するイメージなどについてもご紹介したいと思います。